

生活環境と保育園

— 被害者の立場から見た保育園騒音(その4) —

櫻井 暉

(Ⅰ) 目的 保育園の騒音化の解明

近ごろ デパートの売場・食堂・電車・バスの中・病院でさえも、乳幼児がところかまわず、あたりかまわず、泣き・叫び・嘔鳴り・走り廻って、いたずら・ふざけをやり放題して騒音をばらまきちらし、人びとに迷惑をかけている。にもかかわらず、若い母親は「子供だからあたりまえ」「のびのび育てなくては」「子供だもん」とせしめ顔で見て見ぬふりしている。眉をひそめ、顔をしかめる周囲の人びとにも、いっこうに動じない。中には「叱られるよ」「叱られるから静かになさい」と聞えよがしに大声を出すがお体裁だけで、いっこうにとめようとしない。この世の中は、自分と我が子だけにあるもの。「たかが子供のすること」「目くらまえてるな」という態度である「叱られるよ」という母親の言外に「お母さんは叱らないんだ」という意思表示がありあり。「私の子供ばかりうるさいわけないでしょう」と一言云わなければ気がすまない親もいる。こういう母親は、こうした甘やかし放任保育が、子供の成長にどのような価値があると考えているのか。野放図に育てられた子供はいつまでも格率ができないから、成長とともに意地悪・喧嘩・乱暴と自己主張の行動を強めていき集団の中で、これがセーブされると、仲間からはずれて孤独になり、蔭で弱い者いじめをやり、蔭湿を動き、暴力行為に走りかちになる。若い母親の甘やかし・放任・ご機嫌とりはいかに子供尊重のように見えるが、実際は子供否定の本質をもっている。「一日でいいからこの子供から開放されたい。いっそこのまま蒸発しようか」とか「面倒な子育てはこりごり、私は子供は嫌いです」「子供の世話だけに明け暮れる毎日は許立つばかり、ノイローゼになりそう」とか「子育てに追われてイライラするより外で働く方が楽であり、子育てのわずらわしさから逃れ、解放されたい」ということなのである。近來、こうした母親の保育所預けが激増しており、この育児逃避願望の母親たちから、子供たちを預かっている保育園が、親のしなければならぬ親を親に代ってどのような方法で補完できるかどうか、保育園がより「騒音化」するかどうかのポイントであり、こういう子供たちをどう保育しているか、そのやり方・仕方を時間帯ごとに解析しその騒音化を実証する。

(Ⅱ) 調査方法

- (1) 対象 稲城市立第二保育園・東京・神奈川・埼玉・千葉・公立・私立保育園及び幼稚園
- (2) 期間 昭和47年4月から現在まで
- (3) 資料
 - (イ) 騒音測定値・(デジタル測定器・レベルコーダ(4R-04)・普通騒音計(NA-0))
 - (ロ) 保育園・幼稚園の保育生活の実態の観察
 - (ハ) 保育園・周辺住民からの直接聞きとり
 - (ニ) 設置管理者(行政側)との談合における見解
 - (ホ) 「若き母親の子育ての声」の調査

(Ⅲ) 結果と考察 一斉保育と騒音

(1) 水遊び(プール)の騒音(9:30~11:30)

保育園騒音の最大のものは「水遊び(プール)」の騒音である。子供の音声は周波分析でその主成分が1000Hzから2000Hzにあり、高周波で騒音性が特に強い。そのパワーレベルは1000Hzで115^{dB}~119^{dB}以上でこれは大型トラック、ニューマチックハンマのパワーレベルに匹敵し、プロペラ飛行機のエンジン(110^{dB})より大きい。その上キーキー・ヒューヒュー・ガーガー・ギャーギャー・ウーウーと間断なく、頻発・連続・重複・重疊するから周辺住民が例えプールの位置から5m離れていても、絶えず100^{dB}の騒音の地獄の中におかれる。特に子供は発声力いっぱい、最大限に叫び・嘔鳴り・騒ぎ、言葉が少ないから「天使の声」とどこか周辺住民にとって最も苦痛・恐怖の地獄の時間帯である。この「水遊び」の騒音をさらに巨大化させているものは保母の資質と保育能力である。知的な保育内容や、考え工夫を必要とする技術的保育のできない保母、きめ細かい配慮・努力を嫌がり、面倒を厭い骨惜しみをする保母、ギャーギャー・ヒューヒューと子供が騒いでいないと「お通夜だ」と云わなければならないような保母にとって、「水遊び」は、最も恰好な保育内容となる。こういう保母のいる保育園は朝早くから(9:00)昼食まで(11:20)の気温が19℃~20℃であろうが6月~9月中旬まで曇りの日であろうと、雨さえ降らなければ来る日も来る日も毎日子供をプールに浸けておく、子供が「寒いよー寒いよー」と云っても、保母は「寒くないの」と強く云って子供の唇が紫黒色になっても「ソーレ・ソーレ」と掛け声をかけてやっている。乳児はテラスで幼児は

テラス前園庭の半分も使ってプールを四つも五つも並べて、一斉にキーヒー・キーヒーと互いに顔めかけ水をぶっかけ合う。その上に保母がゴムホースで直接水道の水(15~18)を勢いよく浴びせかける。狂ったように子供はキーヒー・ヒーヒー・ヒーヒーと叫び暴れ騒ぎまくる。保母はアハハハアハハハと大笑いしながら面白がって、ますます水を浴びせかける。「水遊びのクライマックスである。さすがの子供も「やーだやだ・やだ・やだ。」と逃げ廻る。こんどはプールの中に入って五歳児の保母は「アキラカホイ」「アキラカホイ」「アキラカホイ」とデッカイ声で嘯鳴り出す。一斉に園児も「アキラカホイ」「アキラカホイ」と嘯鳴る。四歳児の保母は「123456スッポンポン」「123456スッポンポン」と嘯鳴ると、五歳児に負けまいと四歳児も「123456スッポンポン」を繰り返して、繰り返して嘯鳴り続ける。「水遊び」なのか「嘯鳴り遊び」なのか得体が知れない。

問題点(考察) 5月1日から、幼児みんな裸にして園庭に出し、三人の保母が水道の水をゴムホースで園児の頭から浴びせかけたり、園児を胸高々に抱きあげては、50cmの深さもないビニールプールに次々と投げこんでアハハハ・アハハハと高笑している。バケツで頭から水をかけたり、洗剤ポリ容器に水を入れて園児の顔めかけシュー・シューとやり園児を追いかけ廻す。プールの園児から離れて、ひとりテラスで「ハメハメ大王」を踊っていい気になっている保母。マイクをもって50人ばかりの幼児を前に「瓜切ってきたか、瓜切ってきたか」の大声、子供一人ひとりの瓜を点検するわけでもない。瓜切りの注意や点検は前日までやっておくものの、当日わざわざマイクを持って恰好よろしくやりたがる保母もいる。まさに「水遊び」は子供を裸にして水をかけキーヒー・ヒーヒー云わせてスリルを感じ面白がる保母のふざけと遊びともなっていて保母の気質がよく窺える時間である。保育は意図的・計画的に発展的に行なわれなければならないか、毎日同じこんなことを繰り返して子供の子供の心身の発達をどのようになされるのか疑問をもつ。他の保育内容を全くやらないで、何ヶ月も長期間毎日何時間も「水遊び」を続けて一人ひとりの子供の中に何がどう育っていくのか、三歳・四歳・五歳と何かがどう発展的に育てられるのか、保母のこのやり方のどこが専門的なのか、わからない。つまり「水遊び」は長い一日の保育をどうすべくもない保母の単なる時間つぶしにすぎないのではないのか。

④ 衣服の着脱に伴う騒音

① 水着の着脱と騒音 「水遊び」の始めと終りのけじめである「水着の着脱」を、いかに手早く静かにきまりよくやるか、否かが保育園を騒音化するかどうかのポイントである。ダラダラ・バラバラといつまでも水着をふりまわしたり、脱いだパンツをふりまわしたり、友だちの頭に被せて、キキ・ヒーヒーと騒いでいる。着替えている友だちをたたいたり、おしやったりしてなかなか着替えを終えようとしめない。ふとりが「パンツ・パンツ」と云うと他の子が「ブラジャー・ブラジャー」とか「キンタマ・キンタマ」と嘯鳴り出す。「南無妙法蓮華経・南無妙法蓮華経」とポリバケツをたたくもの「ナンマイダ・ナンマイダ」と嘯鳴って騒然となる。

② 昼食・着替えの騒音(11:30~13:00)

保母が「セーノ」というと園児が大声で「いただきますー」と嘯鳴る。保母が「もう一つ」というと園児が「もう一つ」といい、みんなで「いただきますー」という三回~四回も繰り返す。そして「召し上げれ」と嘯鳴っている。食事をサッサと早く摂った子供は、テラスに出てきてワイワイ騒ぎまくる。着物をふりまわしたり、脱いだものを人々に被せたり「オッパイオッパイ」と嘯鳴りふざけている。「火事だ火事だ」などと叫んだり「助けー助けー」「泥棒・泥棒」「やめてー、離してー」「やだーやだー」と「パンツ下げ」の大騒ぎ。保母はついていない。午睡前のトイレも、テラス前の排水溝と珊瑚樹下の日蔭ですませ「オレのオチンチン、恰好いいだる・恰好いいだる」と大声「オチンチン出しているんだ」「オチンチン出しているんだ」と云っている。

問題点(考察) 好ましい身仕度・食事の仕方は、どうしなければならぬか、という保母のいい聞かせがない。この放りばなしのやり方が、子供の発達・成長にプラスなのかどうか。「食事・着替え」は「遊び」なのか。「遊びの手段」なのか、騒々しくやらなければならないのはなぜか、実に不可解である。

③ 結論

保育園が騒音化するのは、行政側が「親は面倒みるのが面倒だから保育園によこすんだ」と云う親の頼まない自己中心的勝手な振る舞いをする子供を、保母がさらに「何やっただけいい、こーやっておくのが一番いいんだ」と放りばなし「寝なんかすることない、寝は親がやるんだ」「あんな親の子かもうもんか、何もしない」と云って、基本的な生活習慣づけを怠って、望ましい保育集団を形成しないから、子供に自己規制能力が発達せず、従って、無限に騒音が出るのである。